

■シンバシノチカンデショジョソウシツスルミコ

都内地下鉄。人がひしめき合う満員電車の中に、彼女はいた。
白と紅の巫女装束に身を包み、艶のある黒い長髪、押し隠せない豊満体型とくれば、人だかりの中でも否応なく目立つ彼女の名は
宮間 一子（みやま いちこ）……新橋の人々を魔物から守る「新橋の巫女」だ。

普段は企業で働くOLだが、魔物の話を聞けば巫女として活動し、その力で魔を払うことを生業としている。

今回もまた人に魔物が憑りついたと聞いて駆けつけた一子。
しかし地下鉄に逃げられてしまい、仕方なく電車の中にまで来ているのだった。

(憑かれたのは少年だという話だが……)

魔物は少年に憑りついたらしい。……だが、この車両には一子を除き少年ばかりだ。
これでは誰が魔物に憑かれたか、一目では判別できない。

(痴漢行為にでも走れば厄介だ……追うしかない……！)

近年、魔物も一筋縄ではいかなくなってきた。
深追いするのは危険だが、放置すれば痴漢などの『魔が差した』行為に至りかねない。
強引に人混みの中を掻き分けながら移動し……

「……！」

その時、一子の臀部が不意な刺激に襲われる。
少年のような小さな手で衣装越しに触れる感覚。
……魔物に憑かれた者が、痴漢行為に出たのだ。しかも、よりによって巫女である一子に対して。
痴漢被害に遭うのは不快でしかないが、同時に魔物が最も接近する絶好の機会でもある。
一子は素早く大麻（おおぬさ）を取り出し、痴漢少年の頭を叩く。

——悪霊退散！

並みの魔物であれば、この一撃で退治できる。
今回も大したことはなかったようで、少年からは魔物が祓われていく。
しかし——

(これでこの少年も——)

もみもみもみもみもみもみっ♡♡

「んあっ?!」

(な……！ まだ、こんなにも……?)

巫女の力で祓い、今回も無事に事件解決……と思いきや、周囲の少年たちも一子に対し痴漢行為を働き出した。魔物の群れが、一子に悟られぬように少年たちへ憑いていたのだ。彼らは物量で以って一子の身体を捕らえ、乳尻をまさぐり、四肢を拘束する。

「く……！」
(しまった！ 大麻が……)

体格で勝っていても、やはり女。男である痴漢少年たちには膂力では敵わない。力尽くで退魔用の道具まで奪われ、巫女としての能力を発揮できなくされてしまう。更に――

もみ♥ ふるんっ♥ がしっ♥♥
「あっ♥ やめろ……っ♥ ん……っ♥」
(いかん……♥ 私の身体が……悪霊の邪気に侵されている……っ♥)

退魔道具を失ったため、魔物の力が一子に直接的に侵入する。その結果、一子の身体は不自然な発情を訴えていた。また、魔物の影響か少年たちは年不相応な手付きで責め立てる。さながら一流の痴漢師となり、一子の牝の本性を炙り出そうとしているのだ。

「っ……離せ！ あ♥ そこ……っ♥」
(なんだ……っ♥ 声が……出てしまう……っ♥)

装束が肌蹴て、ブラジャーに包まれた爆乳が露わになる。臀部と股間にも巫女装束ではなく下着越しに手が届き、より責めの刺激がつぶさに伝わる。それが一子を瞬く間に昂ぶらせ、気付けば甘えるような声を出してしまっていた。

何より……魔物の卓越した技術、肉体への支配の影響もあるが……一子の身体にも、異様な発情の原因があった。今まで何度も、このような事態……痴漢され、セクハラされ、処女を奪われそうになる目に遭ってきた一子。高潔で気丈な精神は耐えられても、女……『牝』の本能は耐えられない。若く実っていながら、オアズケを喰らい続けて破裂寸前だった本能の箍。それがいよいよ外れ、抑えられない性の衝動となっているのだ。

「おかしい……今まで、こんな♥ あっ♥ んん……っ♥」
(身体が いつものように……言うことを聞かない……っ♥
ダメだ♥ このままでは♥)
もみっ♥ がしっ♥
「離せ♥ 手を……あ……♥♥」
(下着の中に手が――♥♥ ち、乳首も――♥♥)
くりくりくりくりくりくりっ♥ びいんっ♥ ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅうううっ♥♥

「あああっ♥♥ あっ♥♥ あああああああああああ♥♥♥」

乳首、陰核、膣内のスポット。最も敏感な部分を三ヶ所も同時に責められる。
ただでさえ女には耐えられない責め。『牝』と化した今の一子には堪えられるはずもなかった。
一子……新橋の巫女は、あろうことか魔物の憑いた少年の痴漢によって、
絶頂の証で装束を穢すことになってしまった。
だが、失望に浸る間など与えてはくれない。

「や……やめろ♥♥ ダメだ♥♥ それだけは……♥♥」

少年たちは装束を捲り上げ、一子の白い脚、太股、下着が晒される。
狙うはもちろん牝孔—— 一子の処女。

巫女は魔を祓う力を持っているが、それには処女であることが不可欠である。
つまり処女を失えば巫女ではなくなってしまう。
魔物は欲望を満たすため、そして天敵である巫女を無力化させるため、その処女を奪う——犯すことを目的とすることがある。
今回の魔物も巫女、一子の処女を破ることが目的である……それを否応にも悟らされ、一子は必至に抵抗する。

だが、秘部に意識が向いた所でまたも肉突起を責められる。
絶頂に近い快感で不覚にも股が開き——

「いい加減……っ」

くりくりくりくりくりくりくりくりっ♥♥ ♥♥

「お♥♥ あ♥♥ あ♥♥ やめ……♥♥」

(そんな♥♥ 私の……私の処女が……♥♥

魔物などに……っ♥♥)

ずっぼおっ♥♥

「ああああああああああああああああああああ♥♥♥」

最悪の喪失を絶頂と共に叩き付けられ、気丈な一子も流石に悲愴の叫びを上げる。
だが叫びには悲愴よりも快楽の色が濃く、実際に牝秘部は初めて受け入れた男根に甘美の潮を噴いていた。
何度も何度も機会を『逃し』、ようやく与えられた性の悦びに打ち震える美肢。それが小柄な少年の巨根に打ち上げられる。

ずんっ♥♥

「んあっ♥♥ あ♥♥ や♥♥ やめろおっ♥♥」

少年のものとは思えない重く激しいピストン。
処女喪失したばかりの牝壺が対応できるはずもなく、身を貫く快楽に優秀なはずの『元』巫女が翻弄される。

「おぐっ♥♥ ふぐうっ♥♥ う♥♥ つあ……っ♥♥」

(耐えろ……♥♥ 処女を奪われただけでなく♥♥ 快楽に流される……など……♥♥)

処女喪失も巫女として取り返しのつかない事態だが、この上で快楽にも屈せば女としての尊厳まで穢されてしまう。

せめてそれだけは守らねば……そう思う一子だが、肉突きが激しくなるにつれて快楽は強くなり、喘ぎが止まらない。

「ふっ♥♥ う♥♥ ふむんっ♥♥」

ずっぼ♥ ずぶんっ♥ ずぼおっ♥

「お♥♥ お♥♥ おおほっ♥♥ くほおおうっ♥♥」

冷静で厳格な一子のものとは思えないケダモノの啼き声が車両の中に響き渡る。

あられもない牝声に少年も興奮のピークが近付いたか、更に責めは激しく、肉幹の猛りも増していく。

「くふっ♥♥ ま♥♥まさか♥♥ 中に出す気か……っ♥♥」

もう処女は散らされてしまった。だが、これ以上の陵辱を許していいわけではない。

あまつさえ膣内射精を許すなど以ての外だ。

少年の様子から射精寸前であることを読み取った一子はどうにか逃れようと、

両手で吊革を掴むが……

ずぼっ♥ ずぶんっ♥ ずんっ♥ ずぐんっ♥

「ほっ♥♥ ほおっ♥♥ ふっぐ……うううううっ♥♥」

(いけないっ♥♥ 手を使わない分……♥♥ 責めが激しく♥♥)

逃げようとするのはいいが、それまで少年を抑えつけていた手で防ぐことを捨てれば、当然責めは更に強まる。

結果、肉突きは最高潮に加速。快楽も比例し、逃れられるはずもなく——

痴漢少年に対し万歳して股を捧げるような格好のまま、遂にその時が訪れる。

「やめろっ♥♥ もう♥♥ これ以上は♥♥」

ずぼずぼずぼずぼずぼずぼずぼずぼおっ♥♥

「ああああああああああ♥♥♥♥」

ドク♥♥

「お♥♥♥♥」

ゴブ♥♥

「おっ♥♥♥♥」

ビュルルルルッ♥♥ ドビュビュビュウウウウウウウウウウッ♥♥

「お♥♥♥♥ おほおっ♥♥♥♥ お……お♥♥♥♥

おほおおおおおおおおおおおおおおおおおお♡♡♡」

注がれる熱に、一子は頭からつま先まで弾けたように仰け反る。
最奥に届く全力の肉突きの後、脈動と共に断続的に注がれる灼熱じみた熱さの欲液。
子宮の底を精液に撃たれる感触。
それらは今までの人生では感じようもない快感を与え、一瞬にして連続で一子を絶頂させ続けた。
あまりに強い衝撃に眩暈し、身体が一瞬宙に浮いたような浮遊感の直後、脱力してだらりと手すりにぶら下がる。

(そんな♡♡♡ 処女を破られただけでなく♡♡♡ な……♡♡♡ 中に……………っ♡♡♡)

想定を余りに超えた事態に呆然とする。
なによりショックなのは、最悪の陵辱を受けたにも関わらず快感を得ていることだ。
巫女の資格を喪い、それどころか魔物の行為に悦びを感じる……
巫女として、一人の女として完全に屈服させられたというの突き付けられ、思考も言葉も無くしてしまう。
しかし、それも僅かな間のみ。

「ひっ♡♡♡ ま、また……………っ♡♡♡」

痴漢少年は一人ではない。最初の一人が肉根を抜くや、すぐに二人目が一子を犯そうとしているのだ。
もちろん二人目の次、その次と、痴漢たちは待ち構えている。
終着点の見えない痴漢陵辱……その本番が始まろうとしていた。

「まで♡♡♡ やめろおっ♡♡♡」

ずっぽおっ♡♡♡

「おおおおおおおおおおおおおおおおお♡♡♡」

——……

—————……………

体験版はここまでです。続きは製品版で！